

登場人物

辻野 佳穂子（つじの かほこ）

専業主婦。郁哉の母親。四十歳だが、年齢よりも若く見える。色白ぽっちゃり。肩に触れるくらいのシンプルな黒髪ボブ。眼鏡。控え目で優しいお母さん。巨乳。

辻野 郁哉（つじの ふみや）

佳穂子の一人息子。ゲーム大好き少年。

花井 小太郎（はない こたろう）

郁哉の親友。短いスポーツ刈りの小柄な男の子。クラスでは子供っぽい方だが、とても良い奴。

辻野 孝弘（つじの たかひろ）

佳穂子の夫。郁哉の父親。普通のサラリーマン。気さくで郁哉に優しい。

放課後。辻野郁哉にとって、それは最も幸せな時間といえた。なにせ大好きなテレビゲームを、少なくとも夕飯の時間までは思う存分楽しむことが出来るのだから。

「ああ、郁哉くん！今のところ！今の建物の陰にアイテムが隠されてるんだよ！戻って！まだ取れるから！」

「え、ホント？よおし……あ、ホントだ！超パワーアップしたぞ！」

「あはは！すごい！よかったね、郁哉くん！」
「うん、ありがとう！小太郎くん！」

家に遊びにきた花井小太郎と一緒に、郁哉は最近ハマっているアクションゲームに今日も熱中していた。

郁哉と小太郎は、大分前の学年で同じクラスになった時からの大親友で、もう随分長い付き

合いになる。正にお互いゲーム好きということ
で意気投合し、それからというもの、二人で数
え切れないほどのゲームを攻略してきた。

小太郎の方が郁哉よりもゲームの腕前は格
段に上で、いつも郁哉は彼に助けてもらってい
たが、この友達は決してそれを鼻にかけたり威
張ったりすることはなかった。

短いスポーツ刈り頭の小太郎は、名前の通り
平均よりも小柄な可愛らしい男の子で、郁哉と
比べても大分背が低かった。性格的にもどこか
子供っぽいところがあり、郁哉以外のクラスメ
イトからは少し馬鹿にされている部分がある
かもしれない。けれど小太郎はいつも明るく優
しく、郁哉はこの大親友とこれからもずっと仲
良くしたいと心から思っていた。

「…それ！それ！…お！やった！このボス、初
めて倒したぞ！やったよ小太郎くん！」

「うん！おめでとう、郁哉くん！すごいや！」
郁哉のプレイを賞賛してくれる小太郎。自分ならばもっと容易く先のステージまで進めるというのだ。

「郁哉く小太郎くん。おやつ、もってきたわよう。少し休憩したら？」

部屋のドアを開けて入ってきたのは、郁哉の母親の佳穂子だった。脇に置かれた小さなローテーブルに、息子たちのためのケーキとジュースを並べていく。

「ああ、なんだ、お母さんか。もう…せっかく今いいところだったのに」

母親に毒づきながらも、郁哉はゲームを一時ストップさせてコントローラーを置く。

「なんだとは、なによ…もう…ホント郁哉はお母さんに冷たいんだから…長時間ゲーム続けるのは、目にもあんまりよくないんだから、適

度に休憩しなきゃダメなのよ？」

「わかってるって、うるさいな。いただきますあーす。あ、美味しい、このケーキ。ほら、小太郎くんも食べなよ」

「あ、うん：おばさん：いただきます」

「うん。どうぞどうぞ、小太郎くん♪」

傍らに立ち見守る佳穂子の前で、ガツガツケーキを頬張る郁哉と、遠慮深くゆっくりフォークを動かす小太郎。

「ふふふ：小太郎くん、どお？美味しい？」

「は：はい：とても美味しいです：おばさん」

「そう？よかったあ。遠慮しないで食べてね」

「はい：あ：ありがとうございます：」

「：：：：」

母親と親友のやりとりを、郁哉は若干不思議な気持ちで見っていた。二人が友達になってからというもの、放課後は郁哉の家でゲームをする

ことが多く、専業主婦の郁哉の母と小太郎が顔を合わせる機会も、今までに数え切れないほどあった。この親友と母親は、もう知らない仲ではないといったっていいだろう。

ところが小太郎は、いつまで経っても郁哉の母に緊張して、いつもとても恐縮しているような様子なのだった。それも郁哉が思うに、どうも小太郎には、母を女性として意識しているようないがある。それが郁哉には信じられなかった。

四十歳の郁哉の母は、たぬき顔の童顔で年齢よりは若く見られるけれども、それでもおばさんには違いない。肩に触れるくらいの黒髪ボブヘアは綺麗だが、ぽっちゃりと太り、地味な眼鏡をかけて、笑顔は優しいけれども美人とは言い難い。

確かに明るさの中に独特の控え目な品の良

さがあり、郁哉にとっても実は自慢の母親なのだが、それでも客観的に見て女性として憧れの対象になりうるかといえば、なるわけがないというのが郁哉の結論だった。

今までゲームばかりでそんな話をまるでしてこなかったけれど、親友には一風変わった女性の趣味があるのかもしれない。そんな風に思う郁哉だった。

「ほら、お母さんはもういいよ。早く行って行って」

「もう…本当に冷たいんだから…じゃあ小太郎くん。ゆっくりしていつてね」

「あ、はい…ありがとうございます…」

すこぶるぞんざいに扱いながらも、郁哉はこの優しい母親に感謝していたし、普段は絶対言えないが、好きだった。

「よし！じゃあそろそろゲーム再開しよう

か！今日は絶対にクリアしようね、小太郎くん！」

「うん！頑張ろう、郁哉くん！」

ゲームが再開され、また郁哉にとって至福の時間が始まる。素敵な親友と母親に囲まれ、郁哉は本当に幸せな毎日を送っていた…。

※※※

「ええ？ホントに？例の新作、もう入ってるの？」

「ああ、だからこの後みんなでゲーセン行くんだ。お前も来いよ、郁哉」

「うーん。どうしようかなあ」

翌日の放課後。ホームルームも終わり生徒た

ちも帰り始めた教室で、郁哉は山口というクラスメイトと話していた。山口は最近仲良くなつた友達で、髪を染めた不良っぽい生徒だった。そのイメージから周囲からの評判はあまり良くない彼だが、仲良くなった郁哉はその評価が的外れであると知っていた。山口は少しやんちゃなところがあるものの、男気があつてとても気の良い奴だった。

また、山口は郁哉同様ゲーム好きで、特にゲームセンターの最新事情に明るかった。郁哉は母親からそういう繁華なところに入出入りするなと厳しく言いつけられており、ゲームは家で楽しむことが専らだったが、大好きなメーカーの新作タイトルをいち早くプレイ出来るとなれば、話も変わってくる。

「いいだろ、行こうぜ」

「うゝん。でもお母さんにバレたら…うゝむ」

「あ、あの…郁哉くん…」

腕組みで悩む郁哉の元に、帰り支度を済ませた小太郎がやって来た。特に約束はしていなかったが、彼は今日も郁哉の家でゲームをするつもりに違いなかった。

「郁哉くん…ゲームセンターに行くの？」

「え…いや…ちよつと…」

郁哉は言い淀んだ。クラスでも背が低く子供っぽい小太郎は、やんちゃな山口たちのグループとはまるで交流がなかった。小太郎自身が、不良っぽい彼等にビビっている節もある。

さてどうしたものかと思案する郁哉に、小太郎が言った。

「…いいよ、ゲームセンター行ってきなよ、郁哉くん。僕は大丈夫だからさ」

「…そ、そう？…ああ、でも、お母さんにバレたら怒られるかもしれないし…うゝん…」

「ああ、じゃあ僕が郁哉くんの家に行って、おばさんに言ってきてあげるよ。…郁哉くんは学校に残って図書室で勉強してるから、心配なくていいって。それで大丈夫でしょ？だから行つてきなよ、郁哉くん」

「…え？本当に…？いいの？…小太郎くん」
そんなことをしてくれるなら、難なく郁哉のアリバイが完成することになる。

「うんうん！郁哉くんのためなら全然いいよ！だから行っておいで！」

「…小太郎くん…本当にありがとう！恩に着るよ！この借りは絶対いつか返すから！」

よくよく考えれば、彼の親切すぎる提案はどこか不自然だと気づくはずだった。いくら親友とはいえ、わざわざアリバイ工作をするためだけに郁哉の家まで行く理由は小太郎にはないからだ。だが郁哉はこの時、聖人君子の如き親

友に純粹に感謝しかしていなかった。彼の頭は、もはや大好きなメーカーの新作ゲームをプレイ出来る喜びでいっぱいなのだった。

郁哉は山口たちと共に、喜び勇んでゲームセンターへと駆けていった。

「……………」

その後ろ姿を見送った小太郎も、郁哉の家へ向かった…。

※※※

ピンポン！と呼び鈴が鳴り、専業主婦の辻野佳穂子は玄関に向かう。

「はいはぁい…あ、小太郎くん」

ドアを開けたところに立っていたのは、息子

の小柄な同級生、花井小太郎だった。

「あら、小太郎くん。いらっしやい。…あれ？
郁哉は一緒じゃないのかしら？」

この息子の友達は毎日のようにこの家を訪れるのだが、当然息子と一緒に帰宅することが常だった。彼一人だけで先に来るなんてことはまずない。小太郎は言う。

「あ…はい…実は郁哉くん…学校に残って、図書室で勉強しているんです。だから遅くなるそうです。今日はそれを伝えるために来ました…」

「…へえ…それをおばさんに教えるために…家まで来てくれたの？わざわざ小太郎くん、一人で？そのためだけに？」

「あ、はい…そうです…」

「ふーん…うふふ。…それは嘘ね♪郁哉は…そうね、ゲームセンターにでも行ったのかしら？」
「え、な、な、なんでわかつちやうんですか？」

おばさん！」

両目をぱっくり見開き、面白いほどに驚く小太郎。佳穂子は、ニンマリと悪戯っぽい笑みを浮かべて続ける。

「ふふふ…おばさん、郁哉のお母さんを一体何年してると思っているの？息子の考えることくらい、手に取るようにわかるわよ。それが母親ってもののなの」

「そ…そうですか…ご…ごめんなさい」
嘘がバレ、小太郎はしょんぼりと肩をすくめる。

「あは。いいのよ、別に謝らなくたって。たまにゲームセンターに行ったくらいで、おばさん怒ったりはしないわ…それより…小太郎くん？」

佳穂子の口調が少し変わる…。

「は…はい」

「…小太郎くんも……おばさんに嘘ついてること…あるよね？」

「…え」

「…小太郎くんは…郁哉のアリバイ工作のためだけにここに来たわけじゃあないでしよう？…小太郎くんは…本当は…なにをしに…ここに来たんですかあ？」

「…はあ…ゴクツ…」

唾を飲み込み、小太郎は言った。

「……あ……会いに…来ました」

「…誰に？」

「……大好きな……僕の彼女に」

そして小太郎は、背伸びをして自分より背の高い佳穂子の首元にいきなり抱き着いてきた。さらに躊躇うことなく、友達の母親の口を自分の唇で思い切り塞ぐ…。

「んんっ！ぶっちゅううううう！ああ！佳穂

子さん！佳穂子さん！会いたかった！はあ！
会いたかった！ああっ！んん、ぶちゅうううう
う！んん、べろっ！べろべろ！えろえろれろれ
ろれろれろっ！」

「はううん！んんっ、ああ♥んん…えろっ…
れろれろ♥ああん♥えろれろ…♥れろれろれ
おお…♥」

上唇と下唇の隙間を強引に開いて侵入して
きた息子の友達の手を、佳穂子は迷うことなく
受け入れ、あまつさえそのがむしやらの動きに
応じるように自らも彼の舌の先端をぺろぺろ
と舐めた。

玄関先に立ったまま、二人はキツく抱擁し合
い、唾も飛び散る肉欲的なベロチューに耽った。
小太郎より背の高い佳穂子は、息子の友達がキ
スをしやすいように配慮して、わざわざ少し屈
んで中腰を作っていた。

そんなお母さんの、内心は…。

（ああ…小太郎くん…小太郎くん…だいすき

♡ああ…だいすきだいすきだいすき♡小太

郎くん、もうだいだいだいだいだいすきい

～～♡♡♡♡♡♡♡♡）

息子の友達の

イチャラブラブラブ彼女

（言いなりエロエロエロ人形）

になっちゃったお母さん

031

この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件等とは関係ありません。

また、登場人物は全員十八歳以上です。

息子の友達、友達のお母さんというとてもいけない間柄の二人は、リビングに移動して、さらに過激な行為に及んでいた。

「れろっ！んん、ぶちゅう！えろえろっ！れろっ！ちゅうう！ずっちゅうううう！」

「きやうん♥はあ、ああ…ん、あああん♥小太郎くん、だめえん♥あああん♥」

「ああ！佳穂子さん！好き！好きです！大好きです！んん、れろお！べろっ！えろお！んんっ、ぶっちゅううううう！」

「はああん♥ああ、らめえ♥んん、きやはんくすぐったいよお、小太郎くん♥あああん♥はあ…だめえ♥ああ…でも…おばさんも大好き♥ああ♥おばさんも小太郎くんのこと、大好きよお♥くうん♥」

郁哉の母親である佳穂子の口から、つい甲高

く甘い声が漏れてしまう。リビングのソファに並んで腰を下ろし、二人は正面から仲睦まじく抱き合い唇を重ねていたのだが、小太郎は口内だけにとどまらず、佳穂子の頬や耳たぶや耳の中、鼻先にまで貪欲に舌を伸ばしてきたのだ。全く迷いのない肉食丸出しの動きで、彼は佳穂子の顔面のあらゆる場所を執拗に舐めたくり、熱烈なキスの雨を降らせていた。

いかに小太郎が性欲溢れるお年頃とはいえ、本気の愛情を持っていなければ、四十歳のこんなお婆さんの顔をべろべろ舐めたいだなんて思わないだろう。そのリアルな思いを実感出来るからこそ、口先ではやんわり拒絶しながらも、佳穂子は彼に顔面を舐められて本当は嬉しくて嬉しくて仕方なかった。

（あああん♥もつと…もつともつと舐めて小太郎くん！ああっ！お婆さんのお顔をもつと

べろべろべろべろ舐めまくってえ〜ん♥♥

♥)

「はあ！ああ！佳穂子さん！佳穂子さん！べろべろっ！ぶちゅう！ずちゅうううう！ん！ぬぱっ！ぬぱっぬぱっぬぱっ！でゅぽっ！でゅぽっ！でゅぽっ！」

「はあっ！こ、小太郎くん？きやううん♥あ
ああ♥ああああん♥」

小太郎は佳穂子の鼻頭を自らの口内に入れ、それをちゅぱちゅぱと激しく吸引する動きを連続で何度も繰り返した。彼の唾液の濃い匂いが鼻孔を襲うが、佳穂子はそれすら愛しくてたまらなかった。

ここまで真っ直ぐで情熱的な愛情表現なんて、生涯を誓い合った夫だとしてくれたことはない。いや、今までの人生全てを省みても、これほどまでに佳穂子を求めてくれた男はい

やしないだろう。

（ああ！嬉しい！嬉しい！こんなに愛してくれて、おばさん本当に嬉しいわ、小太郎くん！）
「ぬぽっ！ぬぽっ！ぷっ…ぷはっ！はあ…んん、ああ！佳穂子さん！佳穂子さん！佳穂子さんは僕のなに？佳穂子さんって一体僕のなんですか？はあ！ああ、言ってください！何度も何度も言うてください！」

口を離した小太郎は、友達の母親のその豊満な胸を正面からガシガシ揉みしだきながら、佳穂子に注文してきた。既にここまでのとても荒々しい愛撫で、佳穂子のブラウスの前は乱雑にはだけ、妖しい黒のブラジャーがあられもなく顔を覗かせていた。

「ああっ！んん…か…彼女よ！か…彼女です！彼女です！はああん！私は小太郎くんの彼女ですっ！」

「ああ！もつともつと！もつともつと言つて！もつともつと言つて！僕の彼女つてもつともつと言つて！ああ！ぶちゆううう！ねっちゆううううう！ちゅっ！ちゅっ！ちゅっ！べろべろべろ！ぶちゅぶちゅずちゅっ！」

「きゃあああん♥んっ！ああ！彼女です！彼女です彼女です彼女です！わ、私は小太郎くんの彼女ですううう！はあ！んっ…わ、私！辻野佳穂子！四十歳！専業主婦！はああん♥辻野孝弘の妻！はああん！辻野郁哉のお母さんっ！んっ！私！はあっ！息子の同級生の花井小太郎くんの彼女です！花井小太郎くんの恋人です！ああっ！花井小太郎くんの女ですうううう！」

再び顔面に息子の友達の濃厚なキスの雨を浴びながら、佳穂子は大声で叫んでいた。初め

て出来た彼女という存在が嬉しくてたまらないのか、あるいはこの年頃の男の子特有の女性への独占欲の現れなのか、小太郎は事あるごとに自分の彼女であることを佳穂子の口から強調させた。

自分が紛れもなく彼の女なのだということが強烈に意識され、また、いけない関係を結んでいる背徳感を否応なく呼び起こされ、佳穂子は彼の要求に応える度に狂おしいほどの甘いドキドキに満たされるのだった。

「はあ！ああ！ぶちゅううう！ずちゅううう！じゃ、じゃあ佳穂子さんは僕のもの？僕だけのもの？」

「はあああん♥ああ、そう…そうです！辻野佳穂子は小太郎くんのもの！小太郎くんだけのものですううう♥♥♥」

「ああ！じゃあ佳穂子さんは！ああ、べろべろ

っ！旦那さんのものでも…はあ、ふ…郁哉くん
のものでもなく…ぼ、僕だけのものなんだね？
そうなんだね？」

心なしか声を少し震わせながら、極めてセン
シティブなことを訊いてくる小太郎。そんなピ
ンポイントな確認を、本人の口から直接聞きた
がる彼を、佳穂子は心底愛しく思った。

（あああん♡小太郎くん、かわいいい）
♡♡♡ああん♡ホントに可愛いわ、この子♡あ
あ…どうしよう…好き♡もう好き…好き好き
好き♡ああ…もう私、小太郎くんだいだいだい
だあゝい好き♡はあ…そんなに聞きたいの
ね？おばさんが小太郎くんだけのものって…
そこまでして聞きたいのね？いいわ…言っ
てあげます…おばさん…小太郎くんのために…
もう思いつき切って言っ
てあげます…）

愛する彼に喜んでもらうために、母は家族団

薬のためのリビングで喉も裂けよと大声で叫ぶ。

「は、はいいいいいい！あああん♥そうですそう
うですそうです！その通りですううう！は
ああん♥辻野佳穂子は！ああっ！夫の辻野孝
弘のもので！あああん！息子の辻野郁哉の
ものでもありませんええん！全くありませんえ
えええん！絶対に違いまああああす！んん
っ！辻野佳穂子は！ああっ♥花井小太郎くん
のものですっ！はああん！息子の友達の！あ
あっ！大好きな彼氏の！大大大大大大好
きな彼氏の！ああ！花井小太郎くんだけのも
のですううう！それ以外の人のものでは絶
対にありませんえええん！絶対に絶対に絶対
にありませんえええん！私、そんなこと絶対に認
めませえええん！ああっ！私は！はあああ
ん！辻野佳穂子四十歳は！ああ♥花井小太郎

くんだけのものですっ！佳穂子は花井小太郎
くんだけの所有物ですううううう！」

「はあっ！佳穂子さんっ！んんっ！ぶっちゅ
ううううう！」

小太郎は感極まった様子で、真正面から佳穂
子の唇に再び思い切り口づけをしてきた。

心の底から愛し合った二人は、あうんの呼吸
で舌を放り出し、唇はつけずに舌だけを高速で
重ね合わせる下品なベロチューを瞬時に始め
る。

「はあ！べろべろべろべろべろべろっ！
んんっ！佳穂子さん！べろべろべろべろ！」

「あああん♥小太郎くん！小太郎くん！べ
ろべろ！べろべろべろべろべろべろべろべろ
べろべろ！」

「べろべろべろべろっ！んんっ、ぷはっ！は
あ！ああっ！じゃ…じゃあ次は、僕の彼女にな

った経緯を説明して！はあ！大きな声で説明して、佳穂子さん！それで本当に佳穂子さんが僕のものだってことを完全に証明してください！お願いします！んんっ！ぶっちゅうううう！べろべろ！ずっちゅううううう！」

彼女の舌を解放した小太郎は、顔面へのキスと胸への愛撫を再開させ、次にそんなことを言ってきた。小太郎は何故かこのようなマニアックな発言を求めてくることもしばしばだった。だが無論、佳穂子は愛する彼氏のためならば喜んでその望みに応えた。

その顔面と巨大な乳房をまるで供物のように迷いなく彼に差し出し、濡れた舌と両腕の愛撫に力なく晒されながら、佳穂子は言葉を紡ぎだす。

清潔なストレートボブの黒髪と地味な眼鏡の、不倫なんて絶対にしそうにない、品の良さ

に溢れるお母さんは、堂々とした口調で告白する。

息子の友達との、禁断の愛の物語を…。

「はあっ！わ、私！辻野佳穂子、四十歳！はあ！せ、専業主婦ですうう！んん！ああ、息子が一人いて、はあ！郁哉っていいいます！郁哉はゲームが大好きな男の子で、ああ！数年前のある日、家に友達を連れてきましたああ！はあ！ああ♥そ…それが…その子が…い、今！私のおっぱいをガシガシ揉みまくってる！花井小太郎くんでしたああああ！」

「ああ！いいよいいよ！佳穂子さん！続けて続けて！」

「ああ！はい！んっ♥さ、最初は勿論、息子の友達としか見ていませんでした！確かにちよっと！はあ！か…可愛らしい男の子だなとは、ああっ、思っていましたけど！はあ！んん♥そ、

それ以上のやましい感情なんてまるでありませんでした！でもある日、私！なんと！二十歳以上歳の離れたその息子の友達に！いいきなり！ああっ！こ…告白されちゃったんです！マジ告白されちゃったんですううう！」

「はあ！佳穂子さん！佳穂子さん！べろべろべろべろ！ぶっちゅうううううう！」

小太郎の愛に溢れた舌の愛撫が、佳穂子の顔を縦横無尽に駆け巡る。

「きやうううん♥はあ、小太郎くうん♥ああ…んんっ、はあ！わ…私！その告白！う…嬉しかったです！む…息子の友達っていう、ああ！ぜ、絶対いけない関係だったんですけど！こ、こんな若い男の子に女として見てもらえてるんだって思えて！はあ！正直もうすんごくすんごくすんごく嬉しかったですううう！はあ！ありえないほど嬉しかったですう！いけ

ないことなのに！絶対拒否しなきゃいけない
ことなのに！ああ！私、ただただ嬉しかったで
すううう！ガチで嬉しかったですううう！は
あ！真面目な妻として！ああ♥ま、真っ当なお
母さんとして！ひ、一人の大人として！立派な
社会人としてえええ！はあ！本当は冷静さを
保って理性的な対処をしなきゃいけない場面
だったんですけどおお！はああん！ああ、
私！その告白！息子の友達からの告白！純粹
に嬉しいだけでしたああああ！飛び上がっ
ちやうほどに嬉しいだけでしたあああ！ああ
っ！だ、だつて夫は！しゅ、主人は！もう何年
も前から私のことを女としてなんか見てくれ
なくなつてたんですものっ！はあ！だ、だから
私！その告白！息子の友達からの告白！即決
しましたあああ！ああ！即オツケーしました
あああ！その場で即座に息子の友達と付き合

っちゃうこと決めちゃいましたあああ！ああ
♥息子の友達の彼女になっちゃうこと簡単に
決めちゃいましたあああ！はあ！真面目な妻
だったのに！品のある控え目な眼鏡のお母さ
んのはずだったのにいい！ああ！私！夫と息
子を軽く裏切って息子の友達と不倫すること
その場で一瞬で決めちゃいましたあああ
あ！！！」

「ああっ！それで！はあ！べろべろれろれ
ろ！ちゅううう！ちゅちゅちゅううう！は
あっ！息子の友達の僕と付き合い始めて！佳
穂子さんはどれくらいでエッチしたの？付き
合った何日後に僕とエッチしたの？言ってく
ださい！大きな声で言ってください佳穂子さ
ああん！」

「はあ！み：み：三日後ですうう！私！佳
穂子！辻野佳穂子四十歳！人妻なのに！お母